

MURDER
BY
INJECTION
by
Eustace Mullins

現代医学の巨悪の全貌

社 史 修 止 学 会 編 集 ・ 解 説 ・ 矢 部
ユースタス・マリンス 著

医療殺人叢

歴史修正学会編集・解説・矢部 真訳・天童彦二丸監訳



面影橋出版

ともはつよし社

本書は1997年に面影橋出版から刊行された『医療殺戮』を、内海聡氏の序文を加え復刊したものです。

私はこれまで書いた自書において、いくつかの個人的なバイブルがあるということを書いてきた。その筆頭がこの医療殺戮であることは間違いないだろう。邦訳のど真ん中直球な題名もさることながら（英名は *murder by injection*）、内容は単なる思い込みではなく緻密な歴史の記録であり、その内容は裏付けをとってみても何も間違っていないことに感嘆する。なによりもアメリカという国において、20年以上も前にこの本を書いたということには崇拜という言葉さえ思い浮かべる。

医療殺戮は単に陰謀論的な話にとどまることなく、すべて実名で歴史の流れにのっとり書かれている。アメリカ医師会の起源や暗躍した人々、西洋薬というものの起源、ホメオパシーやカイロプラクティックに対する弾圧の歴史、フツ素に秘められた思惑、エイズに隠された謎、ロックフェラー一族とロックフェラー研究所がいつたいたいなんであったのか、その他数多くのデータが示され医学の歴史がいかなるものであったかを、深く学ぶことができる一冊である。

少し私自身の話をさせていただくと、私はもともと医者にも治療者にもなりたくない人間だった。私は高校時代は考古学などの文系志望であったのだが、縁がないという理由で医者になったというよくありがちなクチである。もちろん医療界などそのような人間たちばかりなのだが、私が現在いろいろな活動をしたりこういう本に巡り合えたのも、医者になりたくないばかりか医者も患者も業界も、すべて愚かしいものだと考えていたからに過ぎない。私にとって患者とは今も昔も金ヅルであるに過ぎないし、ほかの医者たちにとっても金ヅルであるに過ぎない。

社はよしつはとも

そんな斜に構えた私は西洋医学などで治りはしないことをすぐに発見できた。若いころに東洋医学の漢方や鍼灸を学び、治療に応用することで改善する人が増えたのは確かだ。しかし実際のところ、その東洋医学だけで現代の難しい病気たちに対応するのは難しい。なぜなら現代の難しい病気たちはすべて作られたものであり、もともと人界にも野生の動物にもその病気は存在するものではなかったからだ。あらゆる社会毒が振り撒かれ、それが現代の病気を作り、さらにそれを治さぬよう殺さぬよう対症療法をし続け、それによって無限なまでの利権と支配構造を手に入れる。ロックフェラーや医療利権者たちはいつも狡猾であることが観察できる。

このような状況を変え、病気が起こることそのものを防ぎ、病気が仮に起こっても治すことができる社会にするためには、その背景をあらゆる人が知ることこそすべてである、と私は考える。そ

の病気を治してもどんな手法を探しても本質的にいえば意味はない。なぜなら病気の原因は常に横に備わっているからであり、治したとみえても次の病気は容易に作られうるからだ。とすれば人間が本質的に健康になるためには、地球が健康になるのと同じように、原因を除去し原因を作り出している悪魔たちを追い出すことしかない。その悪魔とは優生学的なものであり支配思想的なものであり、その虜となった医者や製薬会社や政治家たちであり、資金提供してシステムを確立させたロックスフェラーやロスチャイルドなどの金融資本家たちである。人間は自らの力でこれらを追い出さねばならないし、追い出さなければ永久不滅に奴隷化した社会構造、病気で苦しみ続ける社会構造が続くのみとなる。それは誰かがやってくれるものではなく、自分たちでやる以外達成することはできない。

社はつよはとも

私は医者にも治療家にもなりたくないといったが、本当は今でも同じである。もちろん実際にはTokyo DDC（断薬クリニックという意味）という病院を経営し、NPO法人薬害研究センターを立ち上げ啓蒙にはあたっている。精神薬やワクチンや癌治療を中心にほぼすべての薬を否定し、食事の改善や社会毒の排除と解毒を推奨し、量子物理学を応用して癌や難病にも対応している。これだけをみると普通の新世代型クリニックということになるのだが、それでも私は治療などしたくないのだ。それは私が単に虚無主義で超悲観主義という理由だけではない。

この日本においては多くの人が「人を治したい」と考えているようだ。その気持ちを別に否定しなくてもしようがないが、もともと人間はどんな人間も治せはしないものである。救急で治療したとてそれはロボットでいえば修理したに過ぎない。特に慢性病ではすべてそうだが治すのは本人であり、それは現実を直視し原因に対してアプローチし、真摯に原因除去に向かって行動することによってしか得られない。だが私は人間がそんなことをしないのをよく知っているのだ。だからそんな人間たちなどちつとも治療したくない。

社はよしつはとも

そしてもう一つ、「人を治したい」などという傲慢こそが、現在の状況を作り出している元凶である。私は感じている。本当の治療者とは人間に気付かせることができる能力者であり、自分が治せるなどと自称するすべての治療者は、所詮詐欺師にしか過ぎないと思う。しかしそれでも人々は優秀な治療者を求めているようだが、私は人類など地球のゴミ以下であり滅んでもらって構わないとさえ考えているのだ。だから本質的には治療者どころか人類など地球には不要だと思ってしまうわけだが、それでもそうしないのは私にも子どもがいるからという、エゴイステイックな感覚ゆえに過ぎない。

であればどうするかを私が考えたとき、私は自分が治療するよりも、治療できる本当の能力者たちがちゃんと活躍できるように、社会と人間を変えていくほうが重要だと思った。本心では治療したくもない治療家（内海）が、いちいち病人の治療をしていることは本末転倒なのである。それで

もやっているのは求められるがゆえとお金儲けという、奇妙な構図でしかない。人にはそれぞれ向き不向きや役割というものもあるだろう。そうやって考えれば私の役割は人を治療することではないと思ひ、現在の行動をとっていることになる。私は誰にも支配されたいと思わないし、誰かが誰かを支配する世界がうれしいとも思わない。そういう世界の中で人間が自然の摂理を思い起こすことができるようになれば、はじめて地球上に存続する資格を手にするかもしれない、そう考えて日々発信するようになっている。そして医療殺戮という本に寄稿するうえで重要なことは、この本が私にこのような考えを持たせてくれたり、私が変わるための気付きを与えてくれたという点で、この本に感謝しているということだ。この医療殺戮という本は、私に知識以上に徹底的なまでの自己否定を与えた。それこそが私を根底から変えた原動力だと今でも信じている。

社はつよはとも この本と医療を全否定しているかのような幾人かの人々に会わなければ、私は決して今のような行動や啓蒙活動などすることはなかったであろう。そしてこの本に出会わなければ適当に人を治療して終わる、という人間で居続けたかもしれない。運命という言葉は嫌いだが、もし仮にそのようなものがあるのだとすれば、この本は私が治療家ではなく社会に影響を与える人間となるよう、導いた一つの参考書だったかもしれない。そしてその気付きは私だけでなく多くの人にもたらされたと期待する。だからこそこの本は医者や医療関係者や日本中のセラピストたちにこそ読んでいただきたい。もちろん患者と呼ばれる人たちが読んでも構わないのだが、なによりも多くの人がこれを

読み、医学と医療の正体について理解していただきたい。

私は医療殺戮を読んで医学というのは不要だと確信する。人類にとって必要かもしれないアロパシー医学とは、救急治療くらいしかありえない。それは突き詰めて考えれば、私たち医者や看護師や薬剤師や介護士、医療事務やリハビリ師や整体師やセラピストは、ほとんどすべてが無駄な存在であるということにつながってくるのだ。本来私たちの世界があるべき姿なら、治療するほぼすべての人々は不要であり、現実的にいっても徒弟制度で厳しい修行を積んだ、1/10〜1/20程度の真のプロがいれば十分である。その人たちは部分的には救急医だが、慢性の病気に対応する医療者はどんどん病気を治してしまはずだからだ。さすればやはり今のような人数の医療者は世界中どこにいてもいらぬのである。このことを正直に思えない治療者は治療者たるの資格さえない、治療の手前で転んでいるエセ治療者のレッテルがびったりだと私は思う。

医療殺戮を読んだとき、そのあまりの現実に私たちは絶句するかもしれないが、そこで私たちが現実を直視した時にだけ、世界に大きな変化が現れるであろう。それは地球全体の改善でもあり、病気がない世界の構築でもあり、治療家などが不要な世界の構築でもある。つまり我々は治療家でありながら、治療家をやめるために働いていなければならぬ。医療殺戮から我々に課された仕事というのはそういうことであり、すべての治療家がこの医療殺戮を読むということは、自分を全否

定に追い込んでいく作業でもあるということだ。そしてそれに耐えることができる人々だけが、真の意味で人の治療者であり地球の改善に寄与できるかもしれない。この医療殺戮を勧めるということとはそのような大いなる矛盾を内包している。ぜひ多くの方にさまざまなき付きが得られるであろうことを願ってやまない。

●内海 聡（うつみさとし）

筑波大学医学専門学群卒業。東京女子医科大附属東洋医学研究所研究員、東京警察病院消化器内科、牛久愛和総合病院内科・漢方科勤務を経て、2006年牛久東洋医学クリニック開業。2013年牛久東洋医学クリニックを閉院し、無薬治療と断薬を主軸としたTokyo DDCを開業。現役医師による『医学不要論』（三五館）や『99%の人が知らないこの世界の秘密』（イースト・プレス）等の著書で鋭い主張を展開。ネットのFacebookを中心に注目を集める。

ともはつよし社

献
辞

職員の方々が尽くされた親切と協力に感謝申し上げます
本書を準備する際に、ワシントン・DCの国会図書館の

MURDER BY INJECTION

The Story of the Medical Conspiracy
Against America

by

©EUSTACE MULLINS

*Original English language edition was published
1988 first and 1995 as the third printing
by the National Council for Medical Research
P.O.Box 1105, Staunton, Virginia 24401, U.S.A*